

短編物語『さくらとおおかみ』

1ページ

むかしむかし、山に囲まれた静かな村に、さくらという心優しい女の子が住んでいました。彼女は花が大好きで、毎朝庭に咲く花に話しかけていました。

2ページ

さくらには森の奥に住むおばあさんがいて、週に一度お見舞いに行くのが習慣でした。おばあさんはいつも笑顔で、「よく来たね、さくら」と迎えてくれました。

3ページ

ある日、おばあさんが風邪をひいたという知らせを聞いたさくらは、急いでおかゆと薬をかごに詰めて、森へ向かいました。
「早く元気になってもらわなきゃ」と、さくらは心配そうに呟きました。

4ページ

森の道は薄暗く、木々の間から太陽の光が差し込んでいました。
さくらは怖がることなく、花の歌を口ずさみながら歩いていきました。

5ページ

突然、道の途中に大きなオオカミが現れました。
「こんにちは、小さな娘さん。どこへ行くのかな？」と優しい声で話しかけてきました。

6ページ

さくらは少し驚きましたが、正直に「森の奥のおばあさんの家に行くの」と答えました。オオカミはにやりと笑い、「そうか、それは素晴らしいことだね」と言って姿を消しました。

7ページ

しかし、オオカミは森の近道を知っていて、さくらよりも早くおばあさんの家にたどり着きました。
そして、おばあさんを押し入れに閉じ込め、自分が布団に入って待ち伏せをしました。

8ページ

さくらが家に着くと、布団の中からかすれた声で「おかえり、さくら」と聞こえてきました。
けれど、どこか様子がおかしいことにすぐ気づきました。

9ページ

「おばあさん、今日は声がいつもより低いね？」とさくらが言うと、オオカミは「風邪だからね」と答えました。
さくらは不安になりながらも部屋を見渡しました。

10ページ

「おばあさん、どうしてそんなに耳が大きいの？」
「おまえの声をよく聞くためさ」
「目も大きいし、歯もとても鋭いよ...！」

11ページ

そのとき、オオカミが飛び出して「おまえを食べるためさ！」と叫びました。
さくらは驚きながらも素早くかごを投げて、ドアの外へ逃げました。

12ページ

運良く、近くにいた猟師さんがその叫び声を聞き、すぐに駆けつけてくれました。
猟師さんは勇敢にオオカミを追い出し、おばあさんを押し入れから救い出しました。

13ページ

さくらはおばあさんにぎゅっと抱きしめられて、ほんと安心しました。
「ありがとう、さくら。あなたのおかげで助かったよ」とおばあさんは涙ぐんで言いました。
。

14ページ

それ以来、さくらは森を歩くときは注意深くなり、動物たちの様子にも気を配るようになりました。
村の人たちも、さくらの勇気と優しさを称えました。

15ページ

さくらは学びました。「やさしさと知恵、どちらも大切なんだ」と。
そして今でも、森に咲く花たちと話しながら、おばあさんの家へ通っています。